

し書いてみる。最初は直近のことだ。一昨年1月から昨年6月にかけて家内と二人で正味33日間で日本橋から京都の三条大橋まで旧東海道を踏破した。総歩数115万歩（一日平均35000歩）だった。これは同期でこの道の大先達の吉田清直さんの話に刺激を受けたことが直接の原因で、我々ははじめは京都まで行く気はさらさら無く、近隣散歩の積もりで始めたが箱根を越えた辺りから気合いが入り、本当に京都に辿り着いた次第だ。お陰で見聞や交流も広がり、夫婦共通の話題が増え、老後の円満な生活への道が開けたようだ。道中記は「後期高齢者による旧東海道ブラ歩き」*として自費出版したが、同じ内容は小生のURLの<http://www.m-yamaguchi.jp/>に掲載してある。

数々の失敗談

これまで数多くの失敗を重ねてきた。若い頃は上司の転勤時に東京駅まで皆で見送りに行ったものだ。あるとき課の先輩の転勤時に見送りの方々の名前を記録して後日その先輩に報告をする役割を仰せつかった。しかし入社式にも遅刻したほどの寝坊の小生は当日も出発時刻に間に合わず、あとから先輩の面々から散々油を絞られた。

航空保険部時代三島近辺で部のゴルフ会があり、その帰路三島駅で同期のKさんと二人で蕎麦を食べて新幹線のプラットホームに駆け上がっていくと新幹線が来ている。慌てて飛び乗ったが我々の席には他の人が座っている。ちょっと酔っていた勢いで大きな声で車掌を呼べ、国鉄は何をしているなどと悪態をつけているところに車掌が来た。車掌は一通

思い出すことごと

東京 山口 光 恒



旧東海道箱根越えをする山口さんご夫妻

旧東海道を夫婦で踏破

大分長生きをしたのでこれまでのことを少

り我々の言い分を聞き切符を点検したあと、「お二人はどこに行くのですか」と聞いて来たので、「東京だよ、決まってるだろ」と勢い込んだところ、車掌は落ち着いた低い声で「この列車は新大阪行きです、三島駅では上り下りが同時刻に発車するのでたまにお年寄りには間違えることもあります、お客様みたいな若い方は珍しいですね。次の静岡で東京行きに乗り換えて下さい」ときた。ここでハッと我に返ったが時既に遅し、周りの乗客は笑いをこらえるのに必死という状況だ。ここでシュンとなった我々二人は、デッキに出て道々の体で東京に帰宅した。翌日部のみんなに冷やかされたのは勿論である。

この他バンクーバー駐在時代、娘と息子の中学校のPTAに出たは良いが、そもそも父兄が良くしゃべるので誰が先生かが最後の方まで分からず、おまけに娘と息子のどちらのクラスの会合に出たかも分からず、帰宅してどうだったと家族に聞かれて絶句したこと。課長時代に課長クラスで会社のポート大会に出たが、初心者ばかりで、スタート地点に向かう途中の「ハラキリ」で男子のスタートに間に合わず、女子と一緒に競争させられて女子に負けては一生の不覚と必死に溜いだことなど失敗は枚挙にいとまが無い。

心に残る名演

今でもオーケストラ活動を行い、また家内と演奏会にもよく通っているが、これまで幾度か本当の名演に接したのでその一部を記す。はじめは1962年のジュリアード弦楽四重奏団のベートーベン最後期の傑作（作品135）の演奏である。特に第3楽章は聴いて

いるうちに高揚感で体が震えてきて止まらない。未だにその感覚は思い起こすことが出来る。次は1964年の岩城宏之指揮のN響とロストロポービッチによるドボルザークのチェロ協奏曲だ。ソリストの熱演でN響も聴衆も一体となって盛り上がり、素晴らしい名演だった。これを聞きながら生きる喜びを感じ、音楽の素晴らしさを身を以て体験した。この他最近の日本のオーケストラの著しい技術の向上や、自分で演奏したうち学生時代にヤマハホールで弾いたメンデルスゾーンのパイオリン協奏曲で客席と一体感を感じたことなど色々と挙げたいが紙面が尽きた。

*文中の「後期高齢者による旧東海道ブラ歩き」は、みづたま会蔵書にご寄贈いただいております。